

目 次

発刊の辞 i

凡例 iv

ブラジル全図 vi

第1章 自然と人々の暮らし……………1

0 概観 1

1 ブラジルの骨格をつくる地質と地形 2

古い岩石からなるブラジル陸塊 2/大きな単位でみたブラジルの地形 3/狭いが重要な海岸平野 3/ブラジル高原南東部の急崖と山脈 4/ブラジル高原の鳥状丘と堆積岩台地 5/大陸分裂の影響を残すパラナ堆積盆地 6/アンデス山脈の形成とアマゾン河 7/領域を拡張しつつあるアマゾン河水系・カシキアレ水路 8/台地と低地からなるアマゾン平野 9/世界一広大な湿地帯・パンタナル 10/コラム：ボンデアスーカル型地形 10

2 多様な気候環境 11

一年中多雨な気候 11/熱帯にない熱帯夜 11/冬雨気候のノルデステ沿岸地域 12/干ばつの風土は豪雨の地域 12/セラード地域にも厳しい乾燥 13/雪と霜の地域 13/コラム：干ばつと豪雨の南北 (NS) パターン 14/気温と降水量の対照的地域 14

3 人間の生存を左右する水資源 16

アマゾン河—世界最大の水量とその源 16/3種類に分類されるアマゾン河の支流 16/アマゾン河流域の発電と発電計画 17/世界最大のソブラジーニョ人造湖 17/サンフランシスコ川の開発計画 18/コラム：熱帯果樹栽培のメッカと日系人 19/内陸に向かう河川と水質汚染源 19/アマゾン河流域の貯水池汚染 19

4 植物の世界 20

植生 20/広大なアマゾンの熱帯雨林 21/カーチンガを特徴づける木々 21/ブラジル中西部を占めるセラード 23/セラードの回廊林とセラドン 23/セラードの植物の生活型 24/パラナ松 24/大西洋岸森林 25/コラム：カーチンガに生きるサボテンの芽生え 25

第2章 政治と市民参加……………27

0 概観 27

1 政治の流れ 28

時代区分 28/植民地時代 28/帝政 29/旧共和政 29/ヴァルガス時代 30/ポプリズモの時代 31/軍事政権 31/民主化 32/カルドゾ政権 33/ルーラ政権 34/BOX：政府首班 35

2 政府 36

政体 36/連邦制 36/大統領制 36/連邦政府 37/立法府 39/コラム：憲法の歴史 40/司法 40/州政府 41/ムニシピオ (市) 41/三軍と軍備 42/BOX：ブラジル各州の概要 42/警察組織 50

3 政治アクター 51

政治風土の変化 51/政党 51/BOX:主要政党 52/選挙 52/政治家 53/経済界 54/労働組合 55/農民運動 55/コラム:汚職 56/マス・メディア 56/世論調査 57

4 市民参加 58

非政府組織 (NGO)、非営利組織 (NPO) 58/市民権 59/コラム:世界社会フォーラム 60/消費者運動 60/カトリック教会の政治的な活動 61/先住民運動 62

5 外交 63

国際機関・国際機構 63/先進国との関係 64/ラテンアメリカ諸国との関係 65/ポルトガル語圏諸国との関係 66/アジア・アフリカ諸国との関係 67/通商外交 68/安全保障 68/ブラジル外務省イタマラチ 69

第3章 経済発展71

0 概観 71

1 経済発展の軌跡 72

歴史的概観 72/工業化の初期段階 72/輸入代替工業化 74/高度成長期 75/失われた10年 76/経済自由化 77/コラム:ブラジルの奇跡 78

2 経済発展の構造 79

大土地所有制 79/貧困 80/所得分配 80/産業構造 82/政府主導の開発と外資依存 84

3 マクロ経済 86

経済成長 86/インフレと安定化政策 86/リアル・プラン 88/雇用・失業・賃金 88/金融政策・利子率 90/政府財政 91/為替レート政策 92/対外部門 93/対外債務 94/コラム:通貨危機 95

4 企業体制 96

三脚体制 96/民族系企業 97/外資系企業 98/コラム:ヴォトランチン・グループ 99/政府系企業 101/産業組織・市場構造 101/企業環境 102/コラム:ブラジル企業の社会的責任 (CSR) 103/中小企業 104/民営化 105

5 国際経済との関係 106

貿易政策 106/BOX:M&A 107/国際収支 108/対外貿易 109/直接投資・資本流入 110/地域統合 111

6 地域経済 112

都市と農村 112/北部・北東部 vs 南東部 114/国内労働移動 115/地方分権化 116/地方行財政 117/コラム:多年度計画と地域開発 118

第4章 産業とグローバリゼーション121

0 概観 121

1 産業発展・政策 122

- 産業発展 122/産業政策 123/技術発展 124/標準化 124/科学技術政策 125/ルーラ政権における産業・技術政策 126
- 2 アグリビジネス 127**
- 農業発展 127/農業政策 129/農業地理 129/非伝統的農産品 130/畜産 132/セラード農業 133/ブラジル農業と世界市場 134/農産物流通 136/穀物メジャー 138/林業 138/植林 139/漁業 141/水産加工 142
- 3 鉱業・エネルギー 143**
- 鉱業発展・政策 143/鉄鉱石 144/非鉄鉱物・希少金属 146/コラム：リオドセ社の世界戦略 148/エネルギーバランス 149/電力 149/石油 151/天然ガス 152
- 4 インダストリアル・コモディティ 153**
- 鉄鋼 153/大豆油・大豆粕 153/オレンジジュース 154/紙・パルプ 156/砂糖 156/アルコール 157
- 5 基礎消費財 158**
- 食品 158/プロイラー 160/飲料 160/繊維産業 161/繊維の生産・流通構造 162/綿繊維 165/羊毛・絹 165/化学合成繊維 167/製靴 168/コラム：ブラジル・ファッション 169
- 6 耐久消費財 170**
- 電子機器 170/電子部品工業 171/コラム：マナウス・フリーゾーン 173/自動車産業 174/バスとトラック 174/二輪車 176/自動車産業政策 176/メルコスルと自動車産業 178/各州の投資誘致プログラムと自動車産業 179/コラム：アルコール車 180
- 7 資本財・中間財 180**
- 石油化学 180/化学製品 182/産業機械 184/航空機 184
- 8 先端産業 185**
- バイオテクノロジー 185/ソフトウェア産業 186
- 9 商業・金融・サービス業 188**
- スーパーマーケット 188/ショッピングセンター 188/コラム：CBD vs カルフル 189/金融制度 190/金融機関 190/金融機関の再編 192/銀行集中 194/保険 196/新聞・放送業界 197/出版 198/観光 199/BOX：ブラジルの世界遺産 200
- 10 建設・不動産 201**
- 建設 201/不動産 201
- 11 インフラ 203**
- インフラ政策 203/道路 204/鉄道 205/航空 206/水運 207/港湾 208/上下水道 209/通信 210

第5章 社会と制度213

0 概観 213

1 住民 214

人口の推移 214/人口分布 216/平均余命 216/都市化と出生率の変化 217/コラム：植民地時

代のサトウキビ大農園の子どもの死 218/住民の混血化 219

2 人口移動 220

黒人奴隷 220/コラム:「人種」を決めるのは誰? 221/コロノ移民 222/南部の自営開拓移民 223/国内人口移動と都市人口の拡大 223/ファヴェーラ 226/コラム:ファヴェーラの語源 227/コラム:シンガプーラ・プロジェクト 227/海外流出 228

3 社会構造と社会格差 229

社会構造 229/皮膚の色と社会階層 231/アフターマティブ・アクション 232/治安問題 232

4 家族 234

家父長制拡大大家族の起源 234/代父母制度と家長の役割 234/コラム:世襲カピタニア制とセズマリ
ア制 235/家族機能の分化 236/縁故主義(ネボチズモ) 236/家族形態の変化 237/家族の
小規模化 238/女性世帯 239/単身世帯 240/女性の就労 240/耐久消費財の普及 241/家
庭内暴力(DV) 241

5 教育 242

教育制度の発展 242/教育の普及 243/教育制度 244/識字率の推移 246/就学前教育 247
/コラム:パウロ・フレイレ成人識字教育の実践者 248/初等教育 249/中等教育 250/高等教育
252/非政府組織(NGO)による教育 253

6 社会保障制度 254

社会保障制度の発展 254/2つの年金制度と制度改正 255/年金会計の推移 256/カルドーズ
政権の社会扶助制度 257/アルボラーダ計画 258/ルーラ政権の社会扶助プログラム 258/高
齢者福祉 258/コラム:飢餓撲滅(Fome Zero) 259/障害者福祉 260/児童福祉 260

7 保健医療 261

保健医療の概況 261/社会構造と疾病 261/死亡原因の変化 261/熱帯感染症および結核、ハ
ンセン病 263/エイズおよびエイズウイルス 265/予防接種対象疾患と予防接種事業 265/乳
児死亡 266/妊産婦死亡 266/保健医療システム 267/医療供給と地域保健 268/民間部門と
公的部門の役割分担 269/医療保険制度 270/保健・医療施設 270/ヘルスマンパワー 271/
医薬品の供給 272

8 宗教 273

カトリック教会 273/教会と近代化 274/解放の神学とキリスト教基礎共同体 275/プロテス
タントの隆盛 276/コラム:ユニバーサル神の国教会 277/カンドンプレー 277/日系宗教 278/
民間信仰 279/コラム:シセロ神父信仰 280

第6章 文化と多元性.....281

0 概観 281

1 文学 282

植民地時代(1500~1822年) 282/ロマン主義(1836~70年) 283/リアリズム(1870~1920
年) 283/モダニズム(1922~80年代) 285/ポスト・モダン(1980年代~現在) 286/ヨー
ロッパから独立したブラジル文学 286

2 美術と建築 287

植民地時代前期 287/植民地時代中期(バロックとロココ) 287/コラム:先住民の遺した絵 288

／植民地時代末から帝政時代（新古典主義） 289／コラム：マヌエル様式 290／共和政時代の始まりと折衷主義 291／ブラジル性を求めた「近代芸術週間」 292／新しい文化活動の担い手としての企業 293／サンパウロ・ビエンナーレ 294／国際化をナショナルな原理とする 294／ナショナルからグローバルへ 294

3 音楽 295

ブラジル音楽の多様性 295／フォルクローレ 295／初期都市音楽とショーロの誕生 296／サンパの誕生と発展 296／ボサノヴァとブラジル社会の変化 297／MPB とスターたち 299／バイア音楽の台頭 299／その他の音楽 300／海外のブラジル音楽 300／コラム：ポップカルチャー 301

4 映画 302

揺籃期 302／シネマ・ノーヴォ 302／低迷期 305／ブラジル映画ルネサンス 305

5 テレビ 306

テレビ番組の興隆 306

6 演劇 307

日本におけるブラジル演劇の受容 307／演劇史を画した人々 307

7 スポーツ 309

サッカー 309／コラム：サッカーW杯 309

8 アフロ・ブラジル文化 311

ブラジルとアフリカ文化 311／ルーツと継承 311／アフロ・ブラジル文化と国家 312／コラム：フェイジョアータ伝説に異変 313／現代のアフロ・ブラジル文化 314／コラム：カポエイラ 314／コラム：ジルベルト・フレイレの『奴隷主の館と奴隷小屋』 315

9 フォークロア 316

フォークロアとブラジル社会 316／フォークロアの地域性 316／シクロ・ナタリーノの行事 318／カーニバル 318／聖週間とフェスタ・ジュニナ 319／移民共同体のフォークロア 319／口承文芸 320／コラム：民話の主人公 320／コラム：セバスチアニズモ 321／民俗美術・工芸 322

第7章 環境破壊と持続的開発……………323

0 概観 323

1 開発と森林破壊 324

マタ・アトランチカの消失 324／アマゾン開発 325／コラム：シコ・メンデスの環境保護闘争 326／アマゾン森林破壊 327／コラム：アマゾンのマジカル・ハーブ 329／セラード開発とアマゾン 330／パンタナルの環境破壊 330／コラム：先住民インディオの環境適応 331

2 都市環境の悪化 332

膨張する都市 332／大気汚染 333／水質汚染 336／コラム：サンパウロ大都市圏の環境汚染 337／ゴミ・廃棄物 338

3 環境保護政策 339

環境保護政策の変遷 339／保全単位 340／森林法改正 340／環境犯罪規制 341／コラム：POEMA計画 342／環境保護と市民参加 343／リサイクル 343／環境都市クリチバ 344／コラム：日系人のアグロフォレストリー 345／ルーラ政権の環境政策 346／コラム：G7ブラジル熱帯雨林保全バ

第8章 日本とブラジル349

0 概観 349

1 日系ブラジル人の存在 350

移民史 350/今日のブラジルへの移住者 351/日系人のブラジル社会への貢献 351/日系人とブラジル農業 352/日系人の政治活動 353/日系人企業 354/変容する日系人社会 354/BOX: データでみる日系人社会 355/世代交替と気質の変化 356/デカセギ現象 356/コラム: デカセギ労働者への支援 357/日本のなかのブラジル人社会問題 358/日系ブラジル人への支援 358

2 外交関係 359

日本・ブラジル外交関係略史 359/現在の日本・ブラジル外交関係 360/コラム: もう一つの外交 361/大型経済協力による緊密化 361/ブラジルのアジア外交と日本 362/日本・ブラジル経済関係の展望 363/国際社会における日本・ブラジル関係 364/民間経済外交 364/コラム: 官民合同会議と中南米大使会議 365

3 貿易 366

日本・ブラジル間の貿易 366/対日輸出 366/対日輸入 367/ブラジルの対アジア貿易 368/メルコスルへの入り口 369/コラム: 中国貿易拡大と日本 370/貿易保険 371/日本とブラジルのロジスティックス 371/FTAA と日本・ブラジル経済関係 372

4 投資 373

日本企業の進出 373/日本企業進出と産業発展 374/コラム: ここにも出ている日本企業 375/ナショナル・プロジェクト 375/コラム: セニブラの買収 377/日本企業とリオドセ 377/日本企業のブラジル進出失敗 378/コラム: 消えるイシプラス? 379/日本企業進出とブラジル・コスト 380/コラム: 日本の中小企業のビジネス機会 381/ブラジル企業の日本進出 381

5 経済・技術協力 382

ODA 借款 382/ODA と連邦・州・市政府 383/技術協力 383/コラム: 環境問題と日本の協力 385/JBIC 融資による資金協力 385/セラード農業開発協力 386

6 文化交流 387

日本とブラジルをつなぐ交流団体 387/ブラジルと日本の学術交流 388/日本におけるブラジル研究 389/ブラジルにおける日本研究 390/ポルトガル語メディア 391/コラム: サッカーに限らないスポーツ交流 392/ブラジルサッカーと日本 392/日本におけるブラジル音楽 393/日系人の食生活 394/コラム: 食文化の交流 395/日本人のブラジル旅行 396

第9章 法制度397

0 概観 397

1 憲法 398

1988年憲法とその改正 398/基本原則 398/基本的権利保障 398/国家組織 399/立法権 400/法の種類と立法手続 400/行政権 401/司法権 401/裁判に不可欠の職務 402/国家と民主主義制度の防衛 402/租税と予算 403/経済・金融秩序 403/社会秩序 404/国際法の適用 405

2 私法 405

2002年民法典 405／契約 406／家族法 407／相続法 408／有価証券 409／会社法 409／株式会社法 409／有限会社 410／民事訴訟 411

3 租税 414

租税体系 414／公租公課の種類 414／ルーラ政権の税制改革 415／関税 415／法人所得税 416／商品流通サービス税 417／工業製品税 417／租税条約 418／日本とブラジルとの間の租税条約 418／配当への二重課税排除措置 418／対外支払に対する源泉所得税 419／移転価格 419／純益に対する社会負担金 420／個人所得税 420

4 労働法 421

統合労働法 421／労働者保護 421／労働契約 422／期限の定めのない契約と期限付契約 422／労働裁判所と労働訴訟 423／労働組合 423

5 経済法 424

経済秩序に関する法律 424／経済力濫用禁止法 425／消費者保護法 426

6 対外投資関係法 427

間接投資 427／預託証券 428／投資ファンド 428／外国直接投資 429／利益の送金と資本の回収 429／外貨建融資 430／技術移転契約 430／ロイヤルティ送金 431／フランチャイズ契約 432／外国人法・査証 433

7 環境法 433

環境法制 433／環境行政 434／環境ライセンス 434／環境犯罪法 435

8 その他の法規 436

金融市場法 436／資本市場法 436／サンパウロ証券取引所の格付制度 437／協同組合法 438／財政責任法 439

関連資料……………441

1 ブラジル年表（15世紀～現代） 442

2 略語集 447

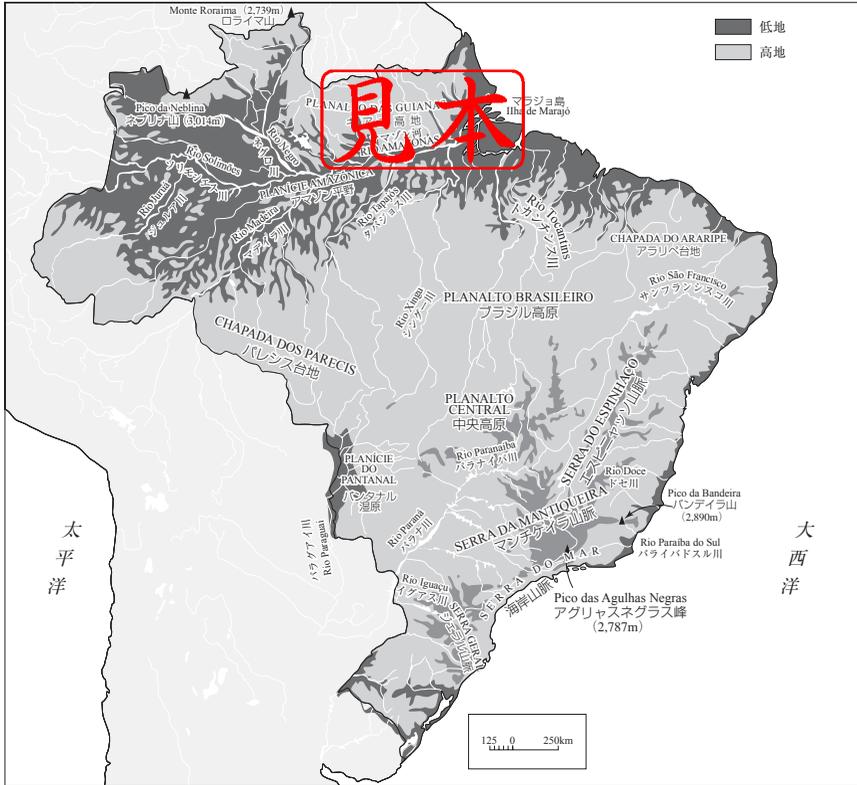
3 文献リスト 469

4 ウェブサイト・リスト 481

索引……………483

執筆者一覧 500

図 1-1-2 ブラジルの地形



(出所) IBGE, *Atlas geográfico escolar*, 2.^a edição, 2004 から作成

山塊にはバンデイラ (Bandeira) 山 (2,890 m) などの高峰がある。イタチアニア山地は、数百万年前 (新生代第三紀) の火山の名残で、火山性の岩石が侵食を受けた変化に富む地形がみられるうえ、豊かな森林に覆われた景勝地である。その一部の約 2,000 ha は 1937 年にブラジル最初の国立公園に指定された。(松本栄次)

ブラジル高原の島状丘と堆積岩台地

大西洋岸に沿った南東のへの山岳地帯を除けば、ブラジル高原の大部分は標高 1,000 m 以下の低い高原である。その中では、トカンチンス川 (Rio Tocantins)、サ

ンフランシスコ川 (Rio São Francisco)、パラナ川 (Rio Paraná) という 3 つの主要河川の分水界付近を選んで建設された首都ブラジリア付近がもっとも高いが、ここでも標高は 1,200 m 程度である。ブラジル高原は、先カンブリア時代 (約 6 億年より前) という古い時代の深成岩や変成岩からなる楯状地と呼ばれる地域と、それ以降の時代の地層からなる堆積盆地と呼ばれる地域とがある。堆積盆地では地層がほぼ水平か、わずかに傾いた状態で横たわっている。楯状地にも堆積盆地にも、長い間の侵食を受けた結果、緩やかに波打った平原がひろがっているが、一部に侵食されにくい

コラム：世界社会フォーラム

就任直後の2003年1月、ルーラ（Lula）大統領がブラジルとスイスで同時期に開催された2つの「世界フォーラム」に出席し、演説したことが話題を呼んだ。そのひとつはリオグランデドスル州の州都ポルトアレグレ（Porto Alegre）市で開催された「世界社会フォーラム（Fórum Social Mundial, 英 World Social Forum）」での24日の演説、もうひとつは毎年スイスのダボスで開かれる「世界経済フォーラム」での2日後（26日）の演説である。

「世界経済フォーラム（World Economic Forum, 別名ダボス会議）」は、世界の著名な政・財界人を集めて経済・ビジネス動向を中心に議論するのに対し、「世界社会フォーラム」は「反ダボス」を掲げて2001年1月にポルトアレグレ市で始まった。03年の第3回までは同市で開催され、04年の第4回はインドのムンバイ市に会場を移したが、05年の第5回はポルトアレグレに戻った。

「世界社会フォーラム」は非政府組織（NGO）が中心となって組織され、市場競争重視の新自由主義（ネオリベラリズム）に反対する立場を鮮明にしている。ポルトアレグレ市を拠点としたのは、同市の市長が労働者党（PT）出身であったことによる。事務局はブラジルNGO協会（ABONG: Associação Brasileira de Organizações Não Governamentais）の中に置かれている。第4回は2004年1月16～21



「世界社会フォーラム」2005年の開会式の平和行進
（写真提供）イエズス会社会司牧センター提供

日の6日間開催され、主催者によると117カ国、1,653組織、7万4,000人が参加し、シンポジウム、ラウンドテーブル、映画、演劇などさまざまなイベントが実施された。

ルーラ大統領にとっては「世界経済フォーラム」に出席することで先進国や国際金融界の信任を取り付ける一方で、「世界社会フォーラム」に出席することで「社会政策を重視する新政権」をアピールする狙いがあったとみられる。同大統領はポルトアレグレで「私の当選はブラジルだけでなく世界の、とりわけラテンアメリカの左翼勢力の希望の現れである」と語り、「多くの人が飢餓で苦しんでいるような経済秩序を続けることはできない」（O Estado de São Paulo, 2003年1月25日）と強調して熱烈な拍手を浴びた。内政、外交両面での同政権による飢餓撲滅（Fome Zero）の主張は「世界社会フォーラム」の流れを汲むものといえる。（堀坂浩太郎）

原案に同市で実施された予算配分決定システムである。16の地区において住民の誰もが参加できるフォーラムが開かれ、原案の優先順位が議論されたのち地区代表が選出される。次に開催される地域フォーラムにおいて、市の予算委員会に参加する2人の代表が選ばれ、住民の意思を反映した予算審議が行われる。ここで決定された予算は再度地区議会に戻され、地区代表とコミュニティの手で各プログラムに利用される。それらの多くは都市インフラ整備と貧困削減に充てられている。このように、政

治支配と権力行使をはっきり区別し、財政支出の透明性を具体化した斬新な試みは、参画型民主主義の構築における興味深い事例となろう。（田村梨花）

消費者運動

ブラジルでは、20世紀後半より非政府の消費者運動（movimento dos consumidores）が数多く組織されており、消費生活の安全性を求める市民の権利を保障するために、積極的な活動を展開している。その規模はラテンアメリカの中でも大きく、国内最大



(写真提供) 西村秀人

年フランスとブラジル合作の映画『黒いオルフェ』(Orfeu Negro)のヒットによってボサノヴァは国際的にも注目を浴び、62年には米国カーネギーホールでボサノヴァ・コンサートが開催され、その頃から北米のジャズ・ミュージシャンがこぞボサノヴァを取り上げ始めた。その中でも63年、ジョアン・ジルベルトとその夫人アストルド・ジルベルト(Astrud Gilberto)、米国のジャズ・サクソ奏者のスタン・ゲッツの共演によるレコード『イパネマの娘』(Garota de Ipanema)は世界的ヒットとなり、全米ヒットチャートの2位まで上りつめた。この間「デザフィナード」(De-

safinado)、「ワン・ノート・サンバ」(Samba de uma nota só)などボサノヴァのスタンダード曲は世界中で録音され広く普及した。しかし北米でボサノヴァがもてはやされる一方、本国ブラジルでは1964年3月のクーデターにより軍事政権が成立、次第に抑圧的な姿を現すに伴って、ボサノヴァの中産階級的な詩の内容は現実を反映していないという批判が起ころしはじめ、社会的なプロテストを含む音楽にとって代わられることになる。ブラジルでのボサノヴァのブームはほんの5年ほどに過ぎなかったが、その音楽的な影響は大変大きいものだった。近年再びブラジルをはじめ世界的

象だったが、ブラジルサッカー最初のスター選手は混血であった。サンパウロ出身の名ストライカー、アルツール・フリーデンライヒ (Artur Friedenreich) は、生涯通産ゴール (1,329) がペレ (Pelé) より多かったとも伝えられる。父親はドイツ移民、母親は自由黒人で、奴隷制廃止のわずか4年後に生まれたのがアルツールであった。1920年代に活躍したフリーデンライヒのプレーを見るために2万人近い人がスタジアムに足を運ぶようになり、観客はますますレベルの高いプレーを求め、1933年、ブラジルサッカーはついにプロ化の道を歩み始めた。そして、アフリカ系選手の特徴を融合させながら、サッカーの母国イギリス、隣国アルゼンチンとも違う独自のスタイルを確立させていった。第二次世界大戦前の3回のワールドカップ (W杯) でブラジルは好成績を残すことはできなかったが、スター選手の宝庫という評判はすでに得ていた。1950年地元開催の大会でこそ準優勝で涙を吞んだが、戦争でヨーロッパ諸国が弱体化していた58年のスウェーデン大会を制覇、ついに念願の世界一の座をつかんだのである。

どの国でもサッカーにはその国の歴史や文化が反映されている。たとえば、黒人や混血の選手たちが名門クラブになかなか受け入れてもらえなかったという事実は、ブラジル社会が人種差別と無縁でないことの証明である。また1970年メキシコ大会での選手たちの容姿も注目に値する。この大会でブラジルは美しいプレーで世界一に輝き、ジュールリメ杯を永久保持したのだが、選手たちの髪型は短髪できれいに7・3に分けられていた。それは、軍政時代のブラジルでは選手団役員も軍人で、彼らが選手に軍隊的規律を要求したからであった。ピッチ上では奔放だった「ペレとその仲間たち」も、実は軍の規律に縛られていたのである。

かつては路地裏の草サッカーから世界的な名選手が次々と生まれたが、都市化が進

写真 6-7-1 ブラジルサッカーのスター



今最も輝いているブラジル人スター選手の1人、ロナウジーニョ (Ronaldinho)。リーガ・エスパニョーラで活躍中 (FCバルセロナ)。2005年1月22日、リーグ第1節での対ラシン戦
(写真提供) ロイター・サン (photo by Albert Gea)

むにつれ、若い才能を組織的に育成する必要が生じた。またブラジルの「芸術サッカー」ではヨーロッパの「力のサッカー」には勝てなくなった。1990年代に入るとブラジルもヨーロッパのサッカーを志向し、アイデンティティの喪失さえ懸念されたが、94年米国大会、そして2002年の日韓共催大会でも優勝し、「王国」の底力を見せた。80年代以降、南米とヨーロッパの格差ゆえに数多くのブラジル人選手がヨーロッパでプレーしているが、彼らがヨーロッパサッカーの長所を消化できたことが94年以降の新たな栄光につながったと思われる。ブラジルは21世紀もワールドサッカーのリーダーであり続けるにちがいない。(市之瀬 教) ⇒コラム: サッカーW杯 (本節)

る政治家を知るのは難しい。しかも、1988年に新憲法が非識字者に投票権を保障するまで、法律上は非識字者には投票権が認められていなかった。20世紀初頭の非識字率は8割、同世紀末には2割と逆転したが、低所得層に非識字者の割合が高いことを考慮すれば、制度上も貧困層に政治に参加できなかったのである。

軍事政権後初の大統領直接選挙でブラジル住民の多数が支持したのは、貧困家庭に生まれ、労働組合運動で頭角を現したルーラ(Lula)候補ではなく、父親はヴァルガス(Vargas)政権で法務大臣を務め、当時アラゴアス州知事であったコロール(Collor)候補であった(図5-4-2)。一族の成員が有力な官職に就くと、その他の成員はその縁故で有利な職に就くことができたり、それを期待する縁故主義(nepotismo)やアフィリヤディズモ(afilhadismo, 身びいき)は、19世紀末に共和制のもとで国民に選挙権が与えられて以来続いてきたブラジル政治の伝統であり、それは家父長制拡大家族から出現した政治文化であるといえる。(三田千代子)

家族形態の変化

植民地時代の家父長支配下で形成された拡大家族は、20世紀後半に入り、規模の縮小化と形態の多様化を辿ってきた。1940年と2000年の家族形態や構成員を比較すると、1940年には両親とその子どもの他に、祖父母やオジ・オバといった親族も同居する拡大家族で、女性が生み育てる子どもの数の平均は6.2人、家族の長は男性という形態が多かった。他方、2000年のセンサスでは、平均の家族構成員数は3.5人(両親と子ども1.5人)で、形態では核家族が大半を占める一方、女性世帯主の割合も2割を超えている。

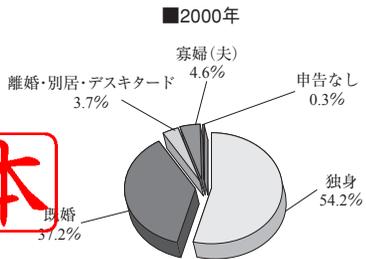
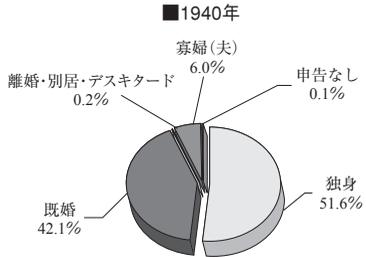
さらに、1940年と2000年の10歳以上の住民の婚姻状態を比較すると(図5-4-3)、婚姻状態にある者と配偶者と死別した者(寡婦・夫)が減少する一方で、独身

図5-4-2 希薄な階級意識



1989年の大統領選挙での貧困層の投票行動を揶揄した諷刺漫画
(出所) Novaes, Carlos Eduardo e César Lobo, *História do Brasil para principiantes*, Editora Ática, 1997

図5-4-3 婚姻の有無(1940、2000年)



(出所) Almanaque Abril 2003

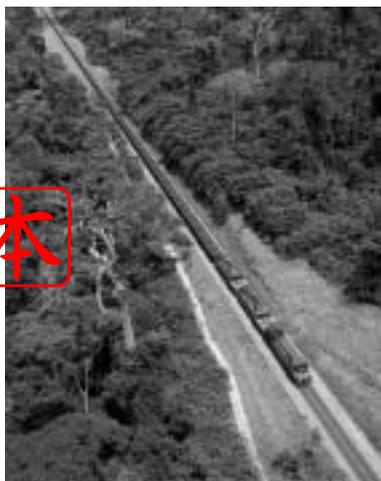
者、離婚・別居・デスキタード(desquitado)の状態にある者が増加する傾向がみられる。さらに、宗教婚にしる法律婚にしる、何らかの公的手続きを経て婚姻関係にある夫婦の割合も減少している。1991年

コラム：リオドセ社の世界戦略

1942年に国営公社として鉄鉱石輸出を目的に設立され、97年に民営化されたリオドセ社（CVRD：Companhia Vale do Rio Doce）は、大規模な鉄鉱山と自社鉄道、港湾設備、ペレット工場のほか、ボーキサイト、マンガン、金その他の鉱産物採掘、アルミナ製造やアルミ製錬、植林、紙パルプなどの事業を擁する一大鉱業コンглоメリットである。2003年には鉄鉱石採掘では国内2位のカエミ（CAEMI）の株式を三井物産から買い取り、鉄鉱石の生産ではブラジル全体の90%を占め、今やオーストラリアのBHP Billitonなどを凌ぐ世界最大の生産者となった。

ブラジル最大の資産規模を有するといわれ、チリの産銅国営企業コデルコ（CODELCO）を上回ってラテンアメリカの鉱業会社としては対抗者がいないリオドセであるが、鉱物資源全般を扱う世界的な巨大企業グループ、たとえばAnglo American（イギリス）と比べると売上高では5分の1、利益では4分の1にすぎず、オーストラリアのBHP Billitonとは売上高では5分の1、同Rio Tintoグループの3分の1に留まるという格差がある。

リオドセは、近年成長著しい中国市場での鉄鉱石などの資源の長期契約推進のほか、自社鉄石の輸送だけでなくさまざまな物品の輸送を引き受けるロジスティックス網の拡充、グループ全体の使用電力などを確保するためのエネルギー部門の拡大、ブラジル北部での銅開発への進出など、従来から手がけてきた事業部門の一層の強化に努めている。経営資源を注力するために、非中



リオドセの物流の要・カラジャス鉄道

核事業と位置づけたセニブラ（CENIBRA：Celulose Nipo-Brasileira）などの紙パルプ、植林部門を売却したのもこのためである。さらに北部での上海宝山鋼鉄（中国）とのスラブ合弁工場設立、国外においても遠くノルウェーでの合金鉄やモザンビークでの石炭開発投資など、世界のトッププレーヤーとの競争に生き残りを賭けて、世界規模での事業展開の布石を着々と打ち始めている。

ブラジル国内あるいはラテンアメリカに拮抗するライバルがいなくなった大企業にとって、次はグローバルな舞台での熾烈な競争が待っているのである。（桜井敏浩）



リオドセ所有のカラジャス鉄鉱山

（写真提供）いずれもリオドセ・アジア社

コラム：ブラジル・ファッション

パリ・コレクションやニューヨークのファッションショーで、1990年代を通して最もギャラが高いトップモデルとして君臨したりオグランデスル州出身のジゼル・ビュンチェン（Gisele Bündchen、日本名はジゼル）として知られる）は、サッカー選手のロナウド（Ronaldo）にも負けないブラジルの広告塔として注目されている。彼女を筆頭に、多数のブラジル出身モデルが各国で活躍することが、ブラジルのデザイナーやブランドの海外進出を助けるはずだ、とファッション関係者は見込んだのだ。ジゼル率いるモデルたちは、欧米の主要コレクションで開かれるブラジル製品のショーなら場合によっては無償でも友情出演してきた。若い世代のデザイナーにとって何よりありがたいのは、経済的なメリットに限らず、モデルの知名度に便乗してテレビや新聞の報道で取り上げてもらえるという宣伝効果である。

ブラジル繊維工業会（ABIT : Associação Brasileira da Indústria Têxtil）は政府の援助で設立されたブラジル輸出振興庁（APEX-BRASIL : Agência de Promoção de Exportação）と共同で戦略プログラム「TEX-BRASIL」を立ち上げ、国際市場への進出を目指しており、その一環として日本での共同出展も企画された。横浜で2003年に開かれた第8回インターナショナル・ファッション・フェア（IFF）には9ブランドが来日した。ブラジルは従来、綿や絹が主に生糸を輸出してきたが、近年のファッション業界の発展は著しく、3万以上の関連会社が140万人を雇用し、年間売上額220億ドルの市場と推計される。ファッションを教える高等機関も急増している。サンパウロとリオデジャネイロで開かれる二大ファッションショー「ファッション・ウィーク」の主催者も、欧米の主要ファッション専門誌の記者をVIP待遇で招聘するなどPRに懸命だ。この官民一体の作戦は徐々に成果を上げつつある。たとえばIFF



ジゼルを起用したブランドの屋外広告

（撮影）リンダ・カオリ・タナカ

に出展したりオグランデスル州のブランドは、すでに欧州や米国の専門誌でも紹介されていることをアピールしていた。現時点でその品質が最も国外の市場で認められているメイド・イン・ブラジルの服飾製品は水着関係だというのが、横浜IFFではビキニの形をした靴やサンダルなど、意表をつく発想の商品も展示された。

ブラジルならではのもうひとつの潮流は天然素材のファッションである。たとえばパンタナル（Pantanal）地域のメーカー組合は特産動物や分布植物から採った自然の色、またインドの手芸品のアクセサリ（動物の骨、牛の角、魚の皮などを使ったもの）を積極的に使用している。利益の一部が環境保護対策に還元される点も話題になっている。他方、1990年代のデカセギ移民のブームに伴い、日本在住のブラジル人モデルやデザイナーが登場している。たとえば2001年の大阪コレクションでデビューしたLinda K（デザイナーはリンダ・カオリ・タナカ）のように、ブラジル北東部の手作りの編み物を取り入れるなど、「日本・ブラジルファッション」ともいえる服作りが芽生えている。

莫大な設備投資を要する電子技術などの分野に比べれば、「創造力」や「デザイン」という「ソフト」で世界と勝負できるファッション業界はブラジル人にとって魅力的だ。世界中の熱い視線が、ジゼルの肉体美ではなく、彼女の身を纏うメイド・イン・ブラジルのブランド品に集中する日を、関係者は待ちわびている。（アンジェロ・イシ）

BOX : M&A

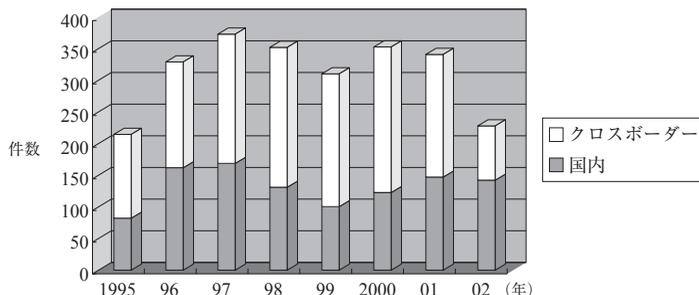
ブラジルでは1990年代に、民営化、資本自由化などの経済改革を契機に、M&A（買収・合併）が活発化した（図 BOX-1）。

M&Aの主な形態はクロスボーダーとなわ
ち外国企業によるブラジル企業の買収であ

ったが、競争激化のなかで事業を再編する外資系企業が他の外資系企業に吸収されるケースもあった。M&Aの対象となった企業の産業分野は、民営化が行われた通信、電気、石油化学などのほかに食品、自動車部品など多岐にわたった（図 BOX-2）。

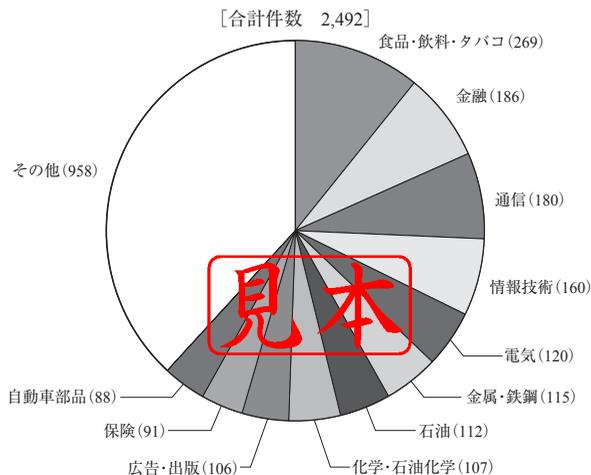


図 BOX-1



(出所) KPMG, *Mergers & Acquisitions Research Transactions Undertaken in Brazil*, 3 rd. Quarter of 2003

図 BOX-2 M&Aの業種別件数 (1995~2002年)



(出所) KPMG, *Mergers and Acquisitions Research Transactions Undertaken in Brazil*, 3 rd Quarter of 2003

